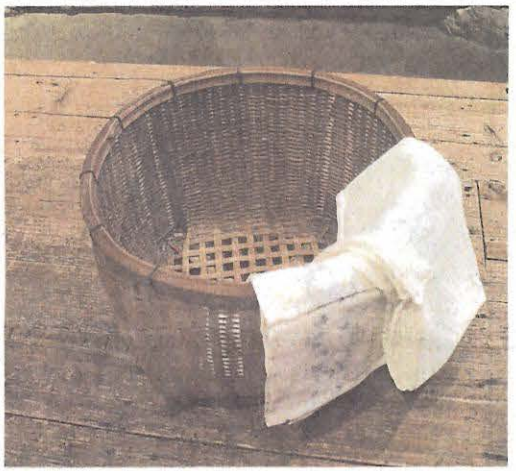
えひめの歴史文化モノ語り

県歴博収蔵資料から ㉑⑧

おむつ籠と布おむつ

近所の川に持参し洗濯



1949～60年にかけて八幡浜市で使われたおむつ籠（直径30.5㌢、高さ25.5㌢）。縁にかかるおむつ（幅31㌢、長さ59.5㌢）は87年に妊娠した娘のために母親が用意した＝県歴史文化博物館蔵

今ではおむつといえば、使い捨ての紙おむつがイメージされるが、かつての子育てでは布おむつが主流だった。今回、使用者も使用年代も異なるが、おむつにまつわる二つの資料を紹介する。

竹製の素朴な籠（かご）はおむつ籠として使用され、底の部分は粗い網目となっており、4本の足がついている。現在でも、紙おむつやお尻ふきを籠にまとめている子育て中のご家庭もあるだろう。ただし、この籠に入れたのは、汚れた布おむつであった。

1926（大正15）年生まれの女性が八幡浜市で使用していた籠で、日常の洗濯物はたらいで洗ったが、おむつは汚れ物のため、おむつ専用の籠に入れ、近所の川へ持参し洗っていたという。薄い布地で乾きやすいため「川で洗った後、家に戻るまで腕などにおむつをひっかけ、乾かすようにして帰った」と笑っていた。

当時、日常の洗濯は、冬なら2～3日に1回程度で、毎日洗濯するわけではなく、正月の松の内の期間には洗濯をしないこととしていたが、おむつだけは例外だった。

大量のおむつが物干しにはためく家は「あそこは今コヤライやけん」と周囲からねぎらわれた。生まれた子どもを親たちが苦労して育て上げ、一人前にしていくことを県内では「コヤライ」や「コアライ」と呼んできた。

次に、籠の縁にかけてあるおむつは、87（昭和62）年に妊娠が判明した娘のために、母親が用意したものである。一般的におむつは、着古した寝間着（ねまき）や浴衣などをほどいて反物状にし、輪になるように縫って仕上げる。使い込まれた布は柔らかく、繊細な乳幼児の肌にも優しい。汚れたら洗濯をし、何度も繰り返して使用するおむつは、使えなくなると雑巾などに転用されたため残存例は多くない。

昭和50年代にテープで止める紙おむつが、昭和60年代には吸水性の高い紙おむつが開発され、外出用として使用する程度だった紙おむつは、徐々に日常の育児で使用されるようになり、布おむつは少数派となった。

育児を助けてくれる頼もしいモノたちは、使用期間が限られており、使い終わるとお下がりとして親戚や友人など必要とする人に譲られることも多く、残りにくい。その一方で、子どもの成長の記録として大切に手元に残されてきたモノもある。

技術の発達や時代の変化とともに、妊娠・出産・育児にかかわるモノは形を変えてきたが、モノに込められた赤ちゃんを思う気持ちは変わらない。

県歴史文化博物館では、本資料も含めた子育て関連資料を展示したテーマ展「昭和の子育て」を31日まで開催中。

（専門学芸員・松井寿）

〈随時掲載します〉

掲載許可番号：d20230301-04